



2003年 8 月 31 日 第 21 号

JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：日本手の外科学会

広報委員会

第46回日本手の外科学会を 振り返って

第46回日本手の外科学会
会長 中 村 蓼 吾

目 次

- 第46回日本手の外科学会を振り返って
- Hand Surgeryの現状
- 第26回日本医学会総会「すこやかメッセ2003」
公開展示出展報告記
- 新Corresponding Memberの紹介
- 新評議員自己紹介(五十音順)
- ハンドギャラリー(児島コレクションⅡ)
- 新教授紹介
- お知らせ =学会案内=
- 編集後記

名古屋大学主催の日本手の外科学会は第21回(中川 正会長)、第31回(三浦隆行会長)につづき15年振りで3度目です。皆様のご支援により名古屋国際会議場で4月18日(金)、19日(土)と学術集会を開催し、20日(日)に教育研修会を開催できたことを大変名誉なことと存じ、御礼申し上げます。

今回は「21世紀手の外科の挑戦と展望」をmain conceptに金曜日、土曜日での開催を試みました。イラク戦争が3月に始まり、外国からの参加が危ぶまれましたが、日本香港手の外科交換フェローのWong先生がSARSのため出国不能となったほかは、支障ありませんでした。3つの招待講演、シンポジウム3題、イブニングレクチャー5題、パネルディスカッション5題、ランチョンセミナー6題、一般演題308題と沢山の企画を行いました。

それぞれの内容の詳細に触れるだけの紙面の余裕がありませんが、シンポジウムⅠ“手の外科とadvanced technology”では21世紀中に臨床応用が期待できる技術につき第一人者にお集りいただき、手の外科発展の鍵とすべく講演をいただきました。新たな手の外科の発展方向を見出された先生が何人か生れたものと確信しています。

パネルディスカッションⅠ“専門医制をどう考えるか”では専門医制認定制度協議会の酒井 紀会長をお招きし、討論しました。手の外科に専門医制を作るべきであること、また、それは教育、研修内容の伴ったものとすべきであることなどが了解されたものと存じます。

ランチョンセミナー「開業医、勤務医大いに語る」では“day surgery”をとりあげました。day surgeryを行うには患者さん本位の医療を基本に、チーム作り、システム作りをして取り組むべきことなどにつき討論がありました。これらの討論が21世紀の手の外科の発展につながっていくものと確信しております。

金、土曜の開催が学術集会にとってどうであったかは来年の学術集会の比較の上で、検討することになっています。印象として、参加者が総数1400名以上と例年より200名前後増加したこと、金曜日より2日目の土曜日の参加者が多く、会場定員分用意した昼食が土曜日には不足したことを考えると、土曜日を開催日に含めると参加者が増加する効果があると思います。

また、日曜日開催の第9回教育研修会も盛会でした。併催の日本ハンドセラピー学会学術集会も日

曜日開催で参加が多く、第26回末梢神経を語る会(18日)にも昨年を上回る参加を得ました。従って学術集会を金、土曜の開催とした日程は大局的には成功したと言えます。

ずいぶん昔には全員懇親会のあった年もありましたが、久しぶりに開催しました。日程が苦しく、午後7時よりの開催でしたが、大変盛り上がり、嬉しく思いました。

プログラム編成の面から学術集会を考えますと、日程的にかなり苦しいことが今後の問題です。参加していただいた先生にとって聞きたい、発言したい発表、講演が同時に2会場、3会場あって困惑させてしまいます。また主催者側からすればこの講演なりシンポジウムは全員参加にできないかと考えても、時間的制約のため困難です。

対策として採用演題数を大幅に減らすことは参加者を減らし、主催者側としても経済的に苦しくなります。他の対策として口演演題を減らし、展示採用を大幅に増やす。日程を3日にするなどを検討する必要があると考えています。理事会を中心にぜひご検討をお願いしたい点です。

手の外科の社会対応では、日本の社会の中で手の外科の認知度をどのように上げ、各地域でハンドセンターが運営できる状況にして行くかが根本的に大切と考えています。とりあえず認知度を上げるには、整形外科・形成外科との連携を強める努力、医学会内での認知度を上げる努力、対社会での認知度を上げる3つの努力がより一層必要になっています。

今回の学会開催に当たり、総合大学としての名古屋大学の特徴も生かすべく学内関連分野の先生を講師にお招きしました。また運営は名古屋大学整形外科教室、名整会のご協力のもとに行いました。

プログラム企画については東海地方の手の外科医、全国の諸先生の協力を仰ぎました。どうもありがとうございました。また色々不手際もありましたがご寛容いただいた会員の諸先生にも深謝いたします。

来年は阿部宗昭会長のもとに第47回日本手の外科学会学術集会が4月22日(木)、23日(金)に大阪国際会議場で開催されます。次の1年の成果を持って多くの会員が参加されるようお願いします。



閉会式にて
第46回会長：中村蓼吾(左)
第47回会長：阿部宗昭(右)

Hand Surgeryの現状

Assistant Editor
別 府 諸 兄

雑誌Hand Surgeryは、香港のSP Chow教授が奇特なスポンサーの協力を得まして、The Asian-Pacific Federation of Societies for Surgery of the Handの official journal として1996年7月に発刊されました。Chow教授はその後5年間にわたり、Editor in Chiefとして多大な努力をされて参りました。その結果、雑誌はIndexMedicsに登録され、数年後には impact factor も期待できることになりました。

前回韓国で開催された4th APFSSHの際に、Chow教授から「Editor in Chiefを日本側で担当し、さらにこの雑誌を発展させてほしい」との要請がありました。日本手の外科学会は慎重に検討した結果、この要請を受けることとし、学会としての全面的な協力のもとに、Editor in Chiefを生田義和先生が担当されることになりました。そして、年2回、2002年の7月から刊行されています。

日本手の外科学会にはすでに日手会誌がありますが、日手会会員にとりましても、英文雑誌であるHand Surgeryを日本で担当することは重要な意味があります。米国のJ of Hand Surgery: American volume, ヨーロッパのJ of Hand Surgery: British volumeに相当する、アジアの英文雑誌Hand Surgeryとして大きく育てていく必要性があります。現在まで、日本手の外科学会事務局で扱いました原稿は70編であり、日本から13編 19%, 日本以外のアジアから18編 26%, アジア以外の国から39編 55%であります。Editor in Chiefとしては、「着実に質の高い雑誌を目指し、impact factorを手に入れるように努力したい」と考えられています。そして、日本の先生方の投稿がもっと増加することを期待しております。投稿件数が増加してまいりましたら、年に3回の発行も可能であります。現在の日本側のEditorial board memberとして三浪明男先生、藤 哲先生、金谷文則先生、Advisory Boardとして山内裕雄先生、玉井 進先生にご協力をいただいております。また本年からは、国際委員会から平瀬雄一、石田 治、編集委員会から井上五郎、牧 裕の4名の先生も加わることになりました。このほかアジアのEditorial board memberは10名おります。査読システムは日本人、海外のEditorial board member各1名に査読をいただき、最終的にEditor in Chiefの判断で掲載を決定しております。雑誌社はWorld Scientific社でSingaporeにあります。雑誌の詳細につきましては、下記のホームページを御覧になりますと、投稿規定、今までの雑誌の抄録、その他必要な情報を得ることができます (URL: <http://www.worldscinet.com/hs/hs.shtml>)。

アジア太平洋手の外科学会の公的な機関誌でありますHand Surgeryの発展は、日本手の外科学会の会員の協力がなくてはなりません。現在、国際手の外科学会会員の先生方に購読をお願いしておりますが、一般会員の先生方、もしくは大学の医局、病院からの購読を積極的に、宜しく願いいたします。雑誌への広告掲載も可能ですので、ご賛同いただける会社等がありましたら、事務局担当(三浦)までご連絡ください。

第26回 日本医学会総会 すこやかメッセ2003 公開展示出展報告記

広報委員会 担当

田中英城

第26回日本医学会総会の一環として一般市民向けの公開展示が2003年4月2日から8日まで福岡ドームで行われました。本総会の杉岡洋一会頭からの要請にお応えして、日本手の外科学会として出展することになりました。そこで生田義和理事長の指揮の下で広報委員会が中心となって企画から運営を担当することになりました。展示説明会が2月にずれ込んだこともあり本格的な準備には1ヶ月半ほどの短い期間でしたが、皆様の精力的な働きのおかげで、なんとか本番に間に合わせる事ができました。

与えられた2畳程の狭いスペースで行ったことは

- 1) DVDビデオによる生田理事長の手の外科学会の紹介と、これに引き続き手の外科シリーズをもとにした手の主な疾患と外傷の紹介
- 2) パネルによる手の外科で取り扱う幅広い分野についての解説
- 3) 手の外科パンフレットの配布
- 4) 医療相談

でした。

手の外科パンフレットは訪れた一般の方々のみならず医療関係者からも大人気で、一人で全シリーズを持ち帰る方も多く、そのため連日パンフレットの補給に追われました。

今後ともこのシリーズを一層充実させていく必要性を感じました。

また、医療相談においては土曜、日曜の両日で160人以上の方が訪れ、これまた大盛況でした。しかし、訪れた方々のほとんどが手の疾患や外傷はどこで、何科で診てもらえばよいのかさぞ存知なく、況や「手の外科医」を知る方は皆無でした。これが手の外科に対する一般市民の認識の現状であるとすれば、日本手の外科学会としては学術活動のみならず社会への啓蒙活動にも力を注ぐ必要性を痛感しました。

せっかくですのでここで、公開展示の全般的な様子についても簡単にご紹介いたします。

今回の大きなテーマとして最先端の医療、暮らしの中の健康情報、安心の街づくり、対話の4つがとりあげられ、様々な専門分野から医学・医療・健康を考える企画となっていました。最先端医療の分野では薬と医療、癌の画像診断について、高度な内容を一般の方々にも理解しやすいように体験ツアーも組まれていました。日本手の外科学会は健康の情報を知るという部門への出展でしたが、ここでは情報が氾濫する現代社会において、いかに自分の必要な情報を探し出し、生活に生かすのかに主眼がおかれていました。そして、各医療機器および製薬関係や健康機器メーカー、食品・飲料品関係、建築および電気通信業界などから多数の出展があり、それぞれの立場から健康との関わり合いを分りやすく展示していました。また安心の街づくりというテーマでは、緊急時の医療救急災害システムや最先端医療のサービスのあり方、宇宙医学に関することがとりあげられていました。中でも最先端のロボット手術のデモンストレーションはひときわ注目を集めていました。最後に対話をテーマにした展示では医療の可能性、安心と納得の医療、新しい医療システムなどについてのパネルディスカッションが行われました。

このように多種多様の専門分野から医学、医療、健康を考るという日本医学会総会ならではの企画に感銘するとともに、日本手の外科学会の向かうべき方向性を改めて考える必要性を感じました。

最後に、生田理事長、広報委員、ご協力いただいた会員の方々ならびに事務局のご尽力に感謝し、この報告を終わらせていただきます。



すこやかメッセ会場風景

新 Corresponding Member のご紹介



Orthopedic and Hand Surgery and Anatomy
Mayo Clinic, USA

Richard A. Berger

It has indeed been a great honor to have been elected a corresponding member of The Japanese Society for Surgery of the Hand and I look forward in contributing to and participating in activities associated with this great society. I will be happy to contribute the essay you have requested. Just for clarification, is the nature of the manuscript scientific (clinical) in nature? Thank you again.



韓国慶北医大整形外科

金 豊 澤

不肖私は、1970年に大邱の慶北医大を卒業し、卒後研修中には金益東教授に、らい患者の腱移行術を中心とした手の機能・再建術などを教えていただきました。更に、1995年札幌医大の石井清一教授のもとで屈筋腱の実験に携わることがありました。以後、日本手の外科学会学術集会には準会員として参加し、山内裕雄名誉教授、上羽康夫教授を始め、1 評議員の先生方々には大変お世話になりました。特に研修会と機関誌というまでもなく、広報委員会監修パンフレットは非常に有益でした。

さて、大韓手の外科学会の近況報告をさせていただきます。

1983年整形外科医と形成外科医が合同で本学会が発足されましたが、1989年に形成外科医のみの手の再建外科学会が創立されました。幸いに、大韓手の外科学会の名で併合統合する運びになり、理事長と会長の制度を導入して、学会の定款を改訂することになり、今年11月19日から施行する予定です。

この度は、伝統ある日本手の外科学会のcorresponding memberに加えていただき大変光栄に存じます。微力ながら世界に雄飛する日本手の外科学会の発展と日韓整形外科・手の外科の架け橋として役立てればと考えております。今後とも宜しくお願いいたします。



Institut Kaplan, Barcelona, Spain
Marc Garcia-Elias

…新評議員紹介…

安部 幸雄（あべ ゆきお）

済生会下関総合病院整形外科



昭和62年宮崎医大卒後、一般病院で研修し、平成3年、山口大学整形外科教室に入局後は土井一輝先生に手の外科、マイクロサージャリーを指導していただきました。平成12年7月から1年間、米国Connecticut州のDr. Watsonに師事し手関節外科を中心に研鑽の機会を得て、現在、済生会下関総合病院にて主に上肢の外科に従事しております。この度本学会の評議員に選出していただき身に余る光栄に思っております。大変微力ではありますが、本学会への学問的貢献はもちろんのこと、社会における手の外科の一層の普及、発展に少しでもお手伝いできれば、と考えております。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

石川 淳一（いしかわ じゅんいち）

北海道大学整形外科



私は昭和62年北海道大学を卒業後、同整形外科に入局しました。研修医時代より北大手の外科の諸先輩からご指導をいただき、平成4年より現在の三浪明男教授に師事し、手の外科を専門に勉強してまいりました。

主に手関節、遠位橈尺関節、TFCCの臨床およびバイオメカニクスの研究に従事し、平成6年より1年間Mayo Clinic バイオメカニクス研究所のKai-Nan An先生のもとに留学させていただきました。これからも伝統ある日本手の外科学会の一評議員として恥じぬよう精励恪勤する所存でございます。今後とも一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

井樋 栄二（いとい えいじ）

秋田大学整形外科



私は1980年に東北大学を卒業、Mayo ClinicでのResearch Fellowを経て、1994年に秋田大学整形外科講師、2000年同助教授、2001年同教授を拝命いたしております。この度、伝統ある日本手の外科学会の評議員に選出されましたことを大変光栄に存じます。私の専門は肩関節外科と骨粗鬆症です。肩関節は上肢と体幹の連結部であり、手、肘の機能と密接なつながりがあります。スポーツ医学の領域でも、手と肩は上肢のスポーツ障害として密接に関わっております。今後は自分の専門を生かしながら、日本手の外科学会の発展のために貢献する所存ですので、何卒よろしく申し上げます。

内尾 祐司（うちお ゆうじ）

島根医科大学整形外科



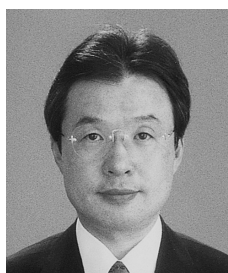
このたび伝統ある日本手の外科学会の評議員に選出いただきましたこと、大変光栄に存じます。手の外科には卒後早期から関心があり、廣谷速人名誉教授、越智光夫前教授のご指導のもと手の外科を学ばせていただきました。両教授が築いてこられた当大学の手の外科をさらに発展させるべく、臨床および基礎研究に取り組んで参りたいと思います。そして、日本手の外科学会のさらなる発展に貢献できますよう、尽力いたす所存でございます。何卒よろしく申し上げます。

面川 庄平（おもかわ しょうへい） 医真会八尾総合病院整形外科



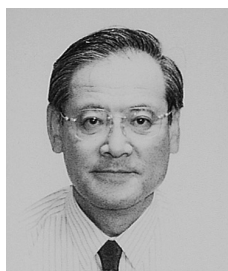
1985年に奈良県立医科大学卒業後、同整形外科医局に入局、手の外科マイクロサージャリーに興味をもち、玉井 進前教授の師事のもとに基礎研修を行いました。その後、奈良国保中央病院で手の外傷を中心に臨床の研鑽を行ない、1995年と1998年にアメリカのウェストバージニア大学に留学、Jaiyoung Ryu先生の指導により手の血管神経の解剖、手足のバイオメカニクスについての研究を行ないました。今回、歴史ある日本手の外科学会の評議員に選ばれたことは誠に光栄です。微力ながら本学会の発展に寄与できるよう尽力したいと考えております。

久保 俊一（くぼ としかず） 京都府立医科大学大学院医学研究科 運動器機能再生外科学(整形外科)



昭和53年に京都府立医大を卒業し、平成14年2月から母校の教授職を拝命しております。この度、伝統ある日本手の外科学会の評議員に選出されたことを大変光栄に思います。教室は、平成15年4月からの大学院重点化に伴い、京都府立医大大学院医学研究科運動器機能再生外科学という名称になっており、卒業後教育にも力を入れております。これを機会に手の外科の教育、研究もより一層充実させていきたいと考えております。また、学会の評議員として微力ながらも学会の発展に寄与する所存でございます。今後とも諸先生方のご指導、ご鞭撻をいただけますようお願い申し上げます。

栗原 邦弘（くりはら くにひろ） 東京慈恵会医科大学形成外科学講座



母指多指症、絞扼輪症候群、裂手・裂足など、手足先天異常症例のスライド写真整理が、医師国家試験に合格し、東京慈恵会医科大学形成外科に入局して初めての仕事でした。以来、35年間今日でもスライド写真、X線写真の整理を行ってきました。独を中心とする欧州での手足先天異常の分類から米国手の外科学会、日本手の外科学会の分類へと推移する経過で学んできました。マイクロサージャリーの導入で治療法は変わり、さらに同種移植、組織培養への技術、治療法の進歩と、ヒトのDNA解析による病因、病態の解明は大きく変化しております。先天異常、外傷を含み、手の外科学の発展に日本手の外科学会を通して少しでも貢献できるよう努力したいと思います。

黒坂 昌弘（くろさか まさひろ） 神戸大学整形外科



この度、平成15年度日本手の外科学会評議員に選出をいただき、大変光栄に存じております。神戸大学では初代、柏木大治名誉教授の下に、日本手の外科学会を開催させていただいた歴史もあり、それ以降神戸大学および関連病院で手の外科の診療チームを作り、手の外科に関する研究および臨床を行ってまいりました。私自身は手の外科については未熟者と言わざるを得ませんが、今後教室の若い先生方とともに、手の外科の診療・教育および研究に力を入れ、日本手の外科学会の発展のために少しでも貢献できるよう努力していきたいと思っております。今後とも、諸先生方のご指導、ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

蔡 詩岳（さい しがく）

東京慈恵会医科大学整形外科



私は昭和55年に慈恵医大を卒業、昭和57～60年まで米国コネチカット州立大学ヘルスセンターの生化学教室で軟骨プロテオグリカンのクローニングを行い、帰国後は膝関節外科と軟骨修復を行って参りました。平成2年に故室田景久前教授から手の外科を勉強するように命じられ、平成7年まで室田先生のもとで研鑽を積み、その後は大学の手の外科を担当しております。平成13年の秋からは慈大柏病院に勤務しておりますが、現在、手の外科とともに股関節や膝関節外科を行っている状況です。今後は、微力ながら日本手の外科学会の発展に尽力したいと存じますので、ご指導の程どうぞ宜しくお願い申し上げます。

齋藤 知行（さいとう ともゆき）

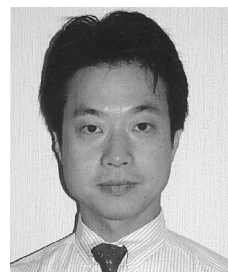
横浜市立大学整形外科



昭和54年に横浜市立大学を卒業し、56年に入局いたしました。リウマチクリニックに所属し、当時はペニシラミンと金剤しか抗リウマチ剤がなく、患者さんは手指や手関節の腫脹や疼痛に苦しんでいました。昭和60年に Clayton 先生に師事しリウマチ外科の研修に留学いたしました。先生は積極的に滑膜切除や人工関節を導入し手の機能再建を試みられ、手の外科は手術や後療法に創意や工夫を生かせ、そのことが成績を向上させることを実感いたしました。整形外科手術治療の基本を理解する上で大変重要な分野と考えています。今後、若い医局員を育成し、微力ではありますが本学会のさらなる発展に尽力していきたいと思っております。

坂野 裕昭（さかの ひろあき）

横須賀北部共済病院整形外科



この度、歴史と伝統のある日本手の外科学会の評議員に選出されたことを大変光栄に思います。私は昭和62年に佐賀医科大学を卒業し同大学整形外科に入局し、現評議員である鶴田敏幸先生に手の外科の教育を受けました。平成元年より横浜市立大学整形外科に移り、手の外科の臨床とアパタイトの基礎実験を行いました。現在、橈骨遠位端骨折や手根管症候群、キーンベック病の研究を中心に行っております。平成14年より現施設に赴任し、年間200件の手の外科の手術を行っております。今後とも本地区で手の外科の先端的治疗を行うことで日本手の外科学会に少しでも貢献できるように頑張っていきたいと思っておりますのでご指導ご鞭撻の程よろしく願いいたします。

佐久間雅之（さくま まさゆき）

名古屋掖済会病院整形外科



昭和62年富山医科薬科大学卒業後、豊橋市民病院、東海病院にて整形外科医として研修をまいりました。この間多くの手の外科評議員の先生方の診察、手術にふれその魅力に引き込まれ名古屋大学にて手の外科を学ばせていただきました。その後シンガポールの Dr. Theoh にマイクロサージャリーの基本を学び平成9年9月から現在の名古屋掖済会病院にお世話になっております。当院は手の外科研修施設にも認定されており手の外科を志す先生方の応募をお待ちしております。今後は手の外科の魅力を少しでも伝え、本学会の発展に貢献できるようにと考えておりますのでよろしくお願い申し上げます。

鈴木 茂彦（すずき しげひこ）

京都大学大学院医学研究科形成外科



私は、昭和52年京都大学形成外科の発足時に入局した一期生です。これまで虚血再灌流障害に関する研究などを手の外科学会で報告してきました。形成外科は皮膚科、整形外科、耳鼻咽喉科を始めとする種々の診療科に関連していますが、手の外科は其中で大きな柱と考えています。手はいくら機能が良くなっても見かけが良くならなければ、使ってもらえません。機能面と整容面の両立に形成外科の進むべき道があると思っています。今後は診療科のチーフとして、微力ながら手の外科の研究の推進、臨床水準の向上、学生教育に取り組んでまいりたいと存じますので、よろしくお願い申し上げます。

砂川 融（すながわ とおる）

広島大学大学院整形外科



私は広島大学を昭和61年に卒業後、テニス部の大先輩である生田現名誉教授が始められていた微小外科に魅力を感じ整形外科に入局いたしました。津下、生田両先生がおられた関係で手の外科は私にとり身近なもので、途中 Mayo Clinic の Bishop 先生の元で今流行の橈骨からの血管柄付き骨移植の有用性を証明する動物実験を行っていた期間がありますが、現在まで広島で手の外科を研修しております。広島の手外科の伝統を受け継ぎつつ、現越智教授の主テーマである再生医療の手法を手外科領域に取り入れられればと考えております。患者さんにより良い医療を提供することが、手の外科ならびに手の外科学会の発展に結びつくと考え、努力していきたいと存じます。

戸部 正博（とべ まさひろ）

東邦大学第2整形外科



私は、昭和63年に順天堂大学を卒業し、順天堂大学整形外科教室に入局、山内裕雄先生に師事いたしました。大学での研究テーマは手指の先天異常に関する実験的研究を行い、大学院卒業後は国立湊病院、順天堂伊豆長岡病院で手の外傷を中心とした臨床経験を重ねて参りました。平成13年より東邦大学第2整形外科に移籍し、橈骨遠位端骨折の治療をテーマに掲げ、リン酸カルシウム骨ペーストなどの骨補填を併用した治療や non-bridge 創外固定器による治療を行っております。これからは手の外科学会の評議員として、微力ではありますが学会の発展に貢献できるよう努力いたしますので、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

中村 俊康（なかむら としやす）

慶應義塾大学整形外科



昭和63年慶應義塾大学を卒業し、直ちに整形外科教室に入室、平成2年に慶應義塾大学大学院に進学し、矢部 裕教授（現名誉教授）に師事、手関節三角線維軟骨複合体の機能解剖の学位テーマをいただきました。それ以降、手関節を中心に仕事を行ってきました。平成6年に大学院修了後、済生会中央病院、藤田保健衛生大学坂文種報徳会病院で手の外科を担当、平成10年からアメリカメーヨークリニックとニューヨーク州立大学バッファロー校に留学しました。平成12年から慶應に帰室し、手の外科班の一員としてがんばっているつもりです。今回評議員に選んでいただき身に余る光栄と存じます。今後も手の外科学会のために貢献していきたいと思っております。

西浦 康正 (にしうら やすまさ) 筑波大学整形外科



昭和61年に慶應義塾大学卒業後、整形外科科学教室に入局しました。平成元年から手の外科班に参加し、矢部 裕先生、内西兼一郎先生、堀内行雄先生ほか、諸先輩のご指導のもと、手の外科の研修をさせていただきました。平成4年からは伊藤恵康先生に多くのご指導をいただきました。平成7年12月から筑波大学に赴任し、落合直之先生ご指導のもとで、手、肘、末梢神経に関する臨床と研究を行っています。また、平成10年9月から2年弱、SwedenのLundborg教授のもとに留学し、末梢神経の研究に携わってきました。まだまだ若輩ものではありますが、日本手の外科学会発展のために、微力ながら努力していきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

乗松 尋道 (のりまつ ひろみち) 香川医科大学整形外科



新潟大学医学部昭和40年卒業です。新潟大学整形外科科学教室に昭和57年3月まで在籍し、その間河野左宙、田島達也両教授の指導を受けました。その後、琉球大学整形外科科学教室の茨木邦夫教授のもとで8年4か月間助教授でしたので、新潟時代から二十数年間優れた手の外科医の診療姿勢を目のあたりにして参りました。平成2年から香川医科大学にありますが、関谷繁樹、田中英城両講師と共に手の外科医育成に努力し、また手の外科領域の療法士、装具士に対する教育の必要性も感じています。どうか宜しく願いたします。

日高 典昭 (ひだか のりあき) 大阪市立総合医療センター整形外科



昭和59年に大阪市立大学医学部を卒業し、整形外科科学教室に入局しました。卒業後5年目に川崎医科大学へ赴任し、山野慶樹教授による手の外科やマイクロサージャリーの手術に接したことが、手の外科医を志す契機となりました。その後、平成元年から大阪労災病院で土井照夫先生、露口雄一先生の指導を受け、平成6年からは大阪市立大学で再び山野教授や楠 正敬先生の薫陶を授かりました。平成11年から現在の施設で手の外科を中心に診療を行っています。第一線の病院のため、プロフィールも治療の難易度も様々な患者さんがやってきますが、一つ一つの症例の治療に全力を注ぐことによって、手の外科の発展に少しでも貢献できればと考えております。

松末 吉隆 (まつすえ よしたか) 滋賀医科大学整形外科



私は、昭和50年に京都大学医学部を卒業後、同大学整形外科科学教室に入局し、関連病院で関節外科、外傷学、手の外科などを広く研鑽しました。当時、切断指再接着が話題で明け方まで手術していたこともありましたが、京都大学に帰ってからは関節外科が専門になり、手の外科領域から少し遠ざかっていますが、吸収性材料の手の外科への応用、肘の離断性骨軟骨炎への骨軟骨移植など新しい治療方法に取り組んできました。今後、組織再生、神経再生の分野で手の外科学会に貢献できれば幸いに存じます。現在の医局で、若い医師の手の外科、マイクロサージャリー領域での臨床や研究が活発になるように努力させていただきます。

吉川 泰弘（よしかわ やすひろ）

平塚市民病院整形外科



日本手の外科学会の評議員に選出していただき、誠に光栄に存じます。私は、昭和61年に慶應義塾大学整形外科学教室に入局し、大学では内西兼一郎先生、堀内行雄先生から、手の外科の基礎を学ばせていただきました。また、出向先の病院でも手の外科の諸先生から指導を受け、1995年より当院で手の外科を中心とした診療に携わっています。1998～2000年にはLund大学(Malmö)手の外科教室に留学し、屈筋腱の修復に関する基礎的研究を行いました。何か新しいことを見い出し、それを治療に結びつけて行きたいと思っています。本学会に微力ながら貢献できれば、と思っていますのでよろしくお願い申し上げます。

ハンドギャラリー（児島コレクション）Ⅱ

埼玉成恵会病院・埼玉手の外科研究所

児島 忠 雄

1. 手の持つ意味

初期の人類は、手には魔力があり、悪霊を追い払い、病気を癒す能力があると考えていました。現在でもイスラエルやチュニジアでは眼の文様を手掌に描いた手が魔除けとして用いられています。病いの人に手を触れて、病気を治す触手療法の原型は紀元前5世紀のギリシャにみられるとされています。イエスキリストはライ患者に手をあててライを治したと伝えられ、その後、国王が病人に手を触れるロイヤルタッチが英国、次いでフランスで盛んに行われました。



一方、アメリカ原住民は開いた手掌に渦巻きの文様を描き、友情・平和を表わしました。北米、中米から、このような手が見出されています。オープンハンドは歓迎を意味し、訪れる人々への感謝をこめて、示されたといわれています（現代的にアレンジされたレプリカや絵が展示されています）。また、眼の文様も手掌に描かれており、中近東の魔除けの手と、眼を描くという点で共通しています。

友情の意味からは、英国をはじめヨーロッパでは、花を持つ手が描かれたグリーティングカードが贈られ、握手をするブローチが交換されたそうです。ここに示す写真はそのブローチです。手と手を通じてお互いの心が伝わる握手は日常生活で友情・愛情・尊敬の念をこめて行われます。握手をモチーフとした作品は多くみられますが、このブローチは19世紀中期のもので、英国ヴィクトリア朝時代の華やかさが伝わってくるようです。

新教授紹介

信州大学医学部整形外科
加 藤 博 之



2003年4月から信州大学医学部運動機能学講座（整形外科）を担当させて頂くことになりました。信州大学整形外科学は1956年7月、藤本憲司名誉教授により開講され、以来寺山和雄名誉教授、高岡邦夫教授と3代にわたり47年という長い伝統をもっています。

寺山名誉教授は人工股関節手術、後縦靱帯骨化症に大きな足跡を残し、高岡前教授は分子生物学的手法を用いた骨代謝・骨形成因子の研究を推進されました。教室発展の担い手として責任の重大性を痛感し身が引き締まる思いが致します。

私は1979年北海道大学を卒業後、直ちに整形外科に入局し松野誠夫教授（現北海道大学名誉教授）より一般整形外科学とともに医師としての心構えを学びました。1983年に石井清一助教授（現札幌医大名誉教授）のご薫陶を得たく北大上肢班での研修を開始しました。その後、薄井正道講師（現東北海道病院長）からマイクロサージャリーを、荻野利彦講師（現山形大学整形外科教授）から上肢先天異常、末梢神経を中心ご指導を頂きました。私が最初に日本手の外科学会に報告した拙稿が日手会誌第1巻に収録されておりますので、日本手の外科学会雑誌とともに研究・研修を続けてきたことになります。1990年からは1年2か月、米国でJaiyoung Ryu先生（現日本手の外科学会 Corresponding Member）のリサーチフェローとして手関節の生体力学を研究いたしました。

その後は、釧路労災病院、北大附属病院、国立西札幌病院を異動しながら北大三浪明男教授のご指導のもと、手の外傷、末梢神経、先天異常、屈筋腱、手関節疾患などの領域で診療・研究を継続してまいりました。また2000年には日本マイクロサージャリー学会、2002年には東日本手の外科研究会の事務局を担当させていただき学会運営を経験し、2000年からは北大整形外科の医局長として教室全体の運営にも多くことを学ばせていただく機会を得ました。

2004年は医学部および附属病院は大きなターニングポイントを迎えようとしております。まず独立行政法人化に伴い診療、研究とも効率性や採算性を求められるようになりますが、日常診療での気遣いや思いやり、基礎医学の分野での好奇心や探求心が置き去りにならないように自戒と謙虚な心を忘れずに仕事をしてまいりたいと思います。また卒後臨床研修制度が開始され新しい臨床医師の育成システムが始まります。長野県の整形外科医数は全国平均の2/3と少ない上に、新制度の導入により今後は整形外科を選択する医学生が減少することを危惧しております。そこで医学生に魅力ある医療・研究をアピールし医学生が信州で整形外科医として活躍したいと思える環境作りが緊急課題であると痛感しております。

このように手の外科の分野での抱負を語るところまではまだまだ切り込んで行けない現状ですが、信州大学の特徴である骨・軟骨の基礎研究を生かした臨床治療方法の開発、加えて靱帯、神経の再生医療、あるいは肢の移植医療にも新たな突破口を切り開いてまいりたいと思っています。また、長野県は橋爪長三先生、中土幸男先生、斎藤寛先生、内山茂晴先生をはじめ多くの手の外科医が活躍しますので、これらの先生方と一緒に外傷、末梢神経などの多施設臨床共同研究を発展させて参りたいと願っております。

最後になりましたが、私が今まで最もお世話になりました日本手の外科学会と学会の先生方には引き続きの指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。日本手の外科学会が国際的なフィールドで一層その存在感をアピールできるように、微力ながら尽力いたす所存です。

.....お知らせ.....

手の外科研修施設一覧

研修内容などの詳細は日手会ホームページをご覧ください。

研修希望者は各研修施設に直接申請，交渉を行ってください。教育研修委員会および日本手の外科学会は研修医の申請，および研修に関しては一切，関与いたしません。

施設番号	施設名	研修責任者	住所	TEL
1	北海道大学医学部附属病院整形外科	三浪明男	060-8638 札幌市北区北15条西7丁目	011-716-1161
2	大阪労災病院	政田和洋	591-8025 堺市長曽根町1179-3	072-252-3561
3	山口県厚生連小郡第一総合病院	土井一輝	754-0002 山口県吉敷郡小郡町下郷 862-3	083-972-0333
4	新潟手の外科研究所	吉津孝衛	950-0965 新潟市新光町1-18	025-283-0306
5	済生会山形済生病院	清重佳郎	990-8545 山形市沖町79-1	0236-41-0849
6	東京手の外科/スポーツ医学研究所	山口利仁	192-0002 八王子市高月町360	0426-92-1115
7	埼玉手の外科研究所	児島忠雄	355-0072 東松山市石橋1721	0493-23-1221
8	聖隷浜松病院 手の外科・マイクロサージャリーセンター	斎藤英彦	430-8558 浜松市住吉 2-12-12	053-474-2222
9	鈴鹿回生総合病院	藤澤幸三	513-0836 鈴鹿市国府町112-1	0593-75-1212
10	医療法人あかね会 広島手の外科・微小外科研究所	津下健哉	730-0811 広島市中区中島町9-5 三津石ビル3階・4階	082-544-1227
11	大阪厚生年金病院	正富 隆	553-0003 大阪市福島区福島4-2-78	06-6441-5451
12	名古屋掖済会病院整形外科	渡邊健太郎	454-0854 名古屋市市中川区松年町4-66	052-652-7711
13	弘前大学医学部附属病院整形外科	藤 哲	036-8562 弘前市在府町5	0172-33-5111
14	広島大学整形外科	越智光夫 石田 治	734-8551 広島市南区霞1-2-3	082-257-5232
15	Nara Combined Program in Surgery of the Hand(奈良マイクロサージャリー・手の外科研究所，奈良県立医科大学整形外科)	玉井 進	631-0024 奈良市百楽園5-2-6 (西奈良中央病院)	0742-43-3333
16	新潟県立瀬波病院リウマチセンター	石川 肇	958-8555 村上市瀬波温泉2-4-15	0254-53-3154
17	山口県立中央病院	酒井和裕	747-8511 防府市大字大崎77	0835-22-4411
18	愛野記念病院	貝田英二	854-0301 長崎県南高来郡愛野町3838-1	0957-36-0015

教育研修ビデオライブラリー 一覧

巻数	タ イ ト ル	講 師
1	腱移行術	津下 健哉
2	手の外科医に必要な皮弁の挙上法	土田 芳彦 他
3	橈骨遠位端骨折に対する種々の手術的治療法	斎藤 英彦 他
4	鏡視下手根管開放術	奥津 一郎 他
5	手関節鏡	玉井 和夫 他
6	Dupuytren 拘縮の手術 有茎血管柄付き DIP 関節を利用した指 PIP 関節再建のコツ	福居 顕宏 黒島 永嗣
7	Herbert Screwによる舟状骨偽関節手術	井上 五郎
8	腕神経叢損傷全型麻痺の再建手術： Double Free Muscle Transfer法(新版)	土井 一輝
9	リウマチ手関節の手術	政田 和洋
10	母指再建術①②	川端 秀彦 他
11	母指再建術③④	稲田 有史 他
12	遊離筋膜脂肪弁移植を用いた先天性近位橈尺骨癒合症の授動術	金谷 文則
13	手の外科手術手技 (1)	津下 健哉 木森 研治
14	手の外科手術手技 (2)	津下 健哉 木森 研治
15	手の外科手術手技 (3)	津下 健哉 木森 研治
16	手の外科手術手技 (4)	津下 健哉 木森 研治

2003 年度最新版

17	指尖切断の被覆法	土井 一輝 他
18	手の外科手術手技 (5)	津下 健哉 木森 研治
19	手の外科手術手技 (6)	津下 健哉 木森 研治
20	手の外科手術手技 (7)	津下 健哉 木森 研治

会員特別頒布のご案内

日本手の外科学会では、各委員会が、会員の活動に役立つ種々の事業を進めております。

ご希望の会員には、実費で頒布いたします。ご希望の方は事務局までお申し込みください。申し込み用紙はホームページからダウンロードできます。なお、在庫に限りのあるものもございますので、品切れの場合はご容赦ください。

教育研修ビデオライブラリー 全20巻（各3,000円（税込）；送料込）

昨年に引き続き、本年度も津下健哉先生より「手の外科手術の基本手技」の最新版3巻をご寄贈いただき、全20巻となりました。是非とも日常診療にお役立ていただきますようご案内申し上げます。

（教育研修委員会委員長 政田 和洋）

手の外科学用語集 改訂版第2版（南江堂）（1冊3,500円（税込）；送料310円）

日手会誌への投稿だけでなく、日常のいろいろな場面で役立つ用語集が改訂第2版として発売になっております。

（用語委員会委員長 浜田 良機）

ネクタイ（1本 3,000円；送料200円）数量限定

スーツとの相性も良く、大好評です。デザインは日手会ホームページ上でご覧いただけます。

なお、数には限りがありますのでお早めにお申し込みください。

（広報委員会委員長 田中 寿一）

タイタック、ネクタイピン、ハットピン（1個800円；送料200円）数量限定

好評を得ておりますネクタイに加え、本年度よりタイタック・ネクタイピン・ハットピンが加わりました。

デザインは故藤巻悦夫先生が第42回日手会の際、記念品として作成されたものをメモリアルとして復刻させました。

是非とも学会にお出かけの際などにお付けください。

（広報委員会委員長 田中 寿一）

学 会 案 内

第12回日本形成外科学会基礎学術集会

会 期：平成15年10月9日(木)～10日(金)
会 場：東京都/京王プラザホテル
会 長：中島 龍夫(慶應義塾大学形成外科)
問合せ先：〒160-8582 東京都新宿区信濃町35 慶應義塾大学形成外科内
TEL 03-3353-1211

第30回日本マイクロサージャリー学会

会 期：平成15年11月13日(木)～14日(金)
会 場：岡山市/岡山コンベンションセンター
会 長：光嶋 勲(岡山大学形成外科)
問合せ先：〒700-8558 岡山市鹿田町2-5-1 岡山大学形成外科内
TEL 086-223-7151

第18回東日本手の外科研究会

会 期：平成16年1月31日(土)
会 場：山形市/山形ビッグウィング
会 長：荻野 利彦(山形大学整形外科)
主 題：1. 手の先天異常
2. 私の治療方針
3. 診断/治療の新しい試み
演題募集：平成15年9月1日～10月15日(水)
問合せ先：〒468-0063 名古屋市天白区音聞山1013 (南)ヒズ・ブレイン内
TEL 052-836-3511 FAX 052-836-3510
E-mail : hand-zao@his-brain.co.jp
詳細は<http://www.jssh.gr.jp/ejhand/>

第25回九州手の外科研究会

会 期：平成16年2月7日(土)
会 場：久留米市/久留米大学筑水会館
会 長：吉田 健治(聖マリア病院整形外科)
問合せ先：〒830-8543 久留米市津福本町422 聖マリア病院整形外科内
TEL 0942-35-3322 FAX 0942-34-3115

第21回中部日本手の外科研究会

会 期：平成16年2月20日(金)
会 場：京都市/ぱるるプラザ京都
会 長：梁瀬 義章(田府興風会北野病院整形外科)
主 題：橈骨遠位端骨折治療の工夫Kienböck病(特にLichtman分類Ⅲ,Ⅳ)の治療
先天異常手の治療(欠指症,指形成不全その他)
演題募集締切：平成15年10月31日(金)
詳細は<http://www.jssh.gr.jp/>

問合せ先：〒530-8480 大阪市北区扇町2-420 田附興風会北野病院整形外科
 TEL 06-6312-8812(内線6398) FAX 06-6312-8867
 E-mail：YANASE@kitano-hp.or.jp

第16回日本肘関節学会

会 期：平成16年2月21日(土)
 会 場：京都市/ぱるるプラザ京都
 会 長：中村 孝志 (京都大学整形外科)
 主 題：肘関節靱帯損傷に対する治療、肘関節外傷性拘縮の治療
 人工肘関節の成績と問題点、離断性骨軟骨炎の治療
 スポーツ肘障害、RA肘に対する治療選択
 肘関節骨折、肘関節画像診断の進歩

演題募集：平成15年 8 月 1 日～9月30日(火)

詳細は<http://www.elbow-jp.org/>

問合せ先：〒468-0063 名古屋市天白区音聞山1013 (倅)ヒズ・ブレイン内
 TEL 052-836-3511 FAX 052-836-3510
 E-mail：kyotolb@elbow-jp.org

第47回日本手の外科学会学術集会

会 期：平成16年4月22日(木)～24日(土)
 会 場：大阪市/大阪国際会議場(グランキューブ大阪)
 会 長：阿部 宗昭 (大阪医科大学整形外科)

シンポジウム：1. 手の外科と疾患－治療の最前線
 2. 手の外科領域における最小侵襲手術

ビデオシンポジウム：1. PIP関節脱臼骨折の治療
 2. Zone IIでの屈筋腱縫合法と後療法
 3. 手指拘縮の治療

パネルディスカッション：1. 手指の骨折治療－私の工夫
 2. 手のスプリント療法－私の工夫
 3. 前腕回旋障害の病態と治療
 4. 橈骨遠位端骨折変形治療例の治療
 5. 絞扼神経障害－再発例の治療
 6. デュピュイトラン拘縮
 7. 手の外科におけるリスクマネジメント

演題募集締切：平成15年10月31日(金)

詳細は<http://www.jssh.gr.jp/>

問合せ先：登録事務局 (有限会社ヒズ・ブレイン内)
 TEL 052-836-3511 FAX 052-836-3510
 E-mail：osaka47@jssh.gr.jp

5th Congress of APFSSH

SARSのため延期決定！下記日程で開催いたします

会 期：平成16年11月12日(金)～15日(月)

会 場：大阪市/大阪国際交流センター

会 長：生田 義和（広島鉄道病院）

問合せ先：〒468-0063 名古屋市天白区音聞山1013 (南)ヒズ・ブレイン内

TEL 052-836-3511 FAX 052-836-3510

E-mail : apfssh@jssh.gr.jp

詳細は<http://www.jssh.gr.jp/5apfssh/>

事務局だより

今号より「事務局だより」としてスペースをいただき、事務局からのお知らせを掲載させていただくこととなりました。今回は岡田が担当させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、世界各国を一気にかけ巡ったSARS。「他人事」のように思っていましたら、5th APFSSHが延期となり、瞬く間に「我が事」になってしまいました。準備担当スタッフはしばらく放心状態で、一からの仕切り直しによりやく気合が入った所です。準備委員会での激論とともに猛威を振るったSARSも、延期が決まった途端に終息となり連日にわたるマスコミ報道の大騒ぎもどこへやら。今は戸外の蝉が短い夏を惜しむかのように大騒ぎで鳴いているように聞こえます。今年は夏が始まるのが遅かった分、残暑が長引くそうです。

会員の皆様、お体ご自愛ください。

担当：岡田 富貴

追伸 今年度は、会員名簿を発行します。住所変更等はお早めにお知らせください。

編集後記

第21号ニュースをお送りいたします。今年は不思議な天候の夏でしたので、体調を崩された方も少なくないのでしょうか？

広報委員会は一部委員の交代がありました。本ニュースも新たな企画に取り組んでいきたいと思えます。ご意見・ご要望などございましたら、お寄せ戴きたく存じます。紙面を充実させるべく今後も努力いたします。

(鈴木 康)

広報委員会

(担当理事：伊藤恵康 委員長：田中寿一 委員：池上博康，島田幸造，鈴木 康，高原政利，谷口泰徳)

…新評議員紹介…

ハンドギャラリー (児島コレクション) II

埼玉成恵会病院・埼玉手の外科研究所

児 島 忠 雄

新教授紹介

信州大学医学部整形外科

加 藤 博 之